

会 議 記 録

高松市附属機関等の会議の公開および委員の公募に関する指針の規定により、次のとおり会議記録を公表します。

会議名	平成27年度第1回高松市創造都市推進審議会
開催日時	平成28年1月16日(土) 13:00~15:00
開催場所	高松市役所 3階 32会議室
議 題	(1) 報告事項 ア 「たかまつ創生総合戦略」について イ 高松市創造都市推進懇談会(U40/2期)の活動について ウ 創造都市ネットワーク日本 政策セミナーについて エ 創造都市推進ビジョン策定後の取組状況について (2) 審議事項 ア 創造都市高松の今後の展開について
公開の区分	<input checked="" type="checkbox"/> 公開 <input type="checkbox"/> 一部公開 <input type="checkbox"/> 非公開
上記理由	
出席委員	佐々木会長、中副会長、大久保委員、木村委員、小西委員、小池委員、橋本委員、平野委員、三井委員、山家委員、鈴木委員、山地委員、渡邊委員
事務局	宮武局長、森近部長、長井部長、藤本場長、佐々木課長、溝渕補佐、平田補佐、塩田係長、永木、米山課長、岡中補佐、河合課長、香西主幹、次田補佐、山本補佐、高尾課長、和田課長
傍聴者	2人 (定員 10人)
担当課および連絡先	産業振興課 創造産業係 839-2411

審議経過および審議結果

<p>1 開会</p> <p>2 議題</p> <p>(1) 報告事項</p> <p style="padding-left: 20px;">ア 「たかまつ創生総合戦略」について</p> <p style="padding-left: 20px;">イ 高松市創造都市推進懇談会(U40/2期)の活動について</p> <p style="padding-left: 20px;">ウ 創造都市ネットワーク日本 政策セミナーについて</p> <p style="padding-left: 20px;">事務局から説明</p> <p style="padding-left: 20px;">U40人見会長からU40(2期)の活動について報告</p> <p>【会長】</p> <p style="padding-left: 20px;">いまの事務局の報告内容について、質問などあればどうぞ。</p> <p>【委員】</p> <p style="padding-left: 20px;">「たかまつ創生総合戦略」について、資料の中に31年度の目標値はあるが、現状の数値はどうなっているか？</p> <p style="padding-left: 20px;">(事務局から現状の数値を補足)</p>

審議経過および審議結果

【会長】

高松市の人口は増加傾向。全国の中核市レベルの都市の中で、どういう特徴があるのかがもうちょっとわかるとよい。増加傾向というのは立派なことだと思う。ただ内訳をみると生産年齢が減り、こどもが減っていることが問題なので、そこに着目して積極的なアプローチをしていくことが必要。増加傾向を維持するという目標でもよいのではと感じる。

【事務局】

国勢調査の速報によると香川全体は減少、その中で高松市は微増。これは社会増が要因。社会増に対する行政の分析は、日本全体の人口が減る中で、社会増を維持していくことも難しいだろう。年齢別の人口データはすでに決まったものとしてあるので、移民などの政策をとらない限りは逃れられない運命。減少傾向を少しでも食い止めようという想定で、現実的な目標をかかげている。

【委員】

東かがわ市は7%落ちている。県内周辺市町から高松に入った社会増なのか、県外から入った社会増なのかがわかれば教えていただきたい。

【事務局】

正確な数字は国勢調査の詳細な分析を待たないといけませんが、大雑把な傾向としては、香川県内からの流入が多いと認識している。他県から社会増がこれまでに對して増えてくるといふ要因はあまり見当たらない。

高松市はいわゆる線引き廃止をしている。どこのマチも都市計画をもっていて、用途をもっている。市街化調整区域というものがある。そこは住宅が建てられないので少し前までは一宮・三谷・仏生山あたりは家が建てられないエリアだったが、線引き廃止によって建てられるようになった。まちづくりからいうとコンパクトにまとまっていたものを緩く分散してしまっていて、マイナスになっているが、住居にあてられる面積が増えるようになったというメリットもある。

【会長】

人口問題というとはやはり出生率。そのあたりで女性の委員で何かコメントがあれば。

【委員】

男女共同参画の推進があるが、事業所側からお願いがよく出ると思うが、保育所の土日祝の受入について。サービス業などに携わる人にとって、受け入れてもらえる先がないと、事業所側も雇いにくかったり正社員にしにくかったりする現状がある。そのところはどうか。

【事務局】

担当局ではないので具体的な話ができないが、健康福祉局・こども未来部に貴重な御意見があったことを伝える。

【会長】

高松市は創造都市の取組に「こども」の視点を最初から重点をおいていて、これは全国的にも珍しいこと。創造都市ビジョンと子育てしやすいマチとしての計画をあわせて進めてほしい。

芸術士のその後はどうか。

【委員】

昨日も札幌市などから視察研修に来て、現場の見学やミーティングをしている。

個人的には札幌市をうらやましく思っていたので、注目してもらえていることに驚いた。芸術士のようなことを単独でやっている他県の保育所からは、単独でやっていることの限界を感じているという話や市として取り組んでいることをうらやましがられている。7年前に自分たちが始めた頃の初心を取り戻すような機会をたくさんいただいている。

また、他県から始めたいという相談もきていて、それに対応している状況。市内の評価よりも周辺のみなさんからの評価をたくさんもらっている。

【委員】

こどもの貧困対策、こどもの居場所、ひとり親世帯の対策について、市の施策はどうなっているか。

【事務局】

高松市ではこども未来部を作って、こどもの事業を強化して取り組んでいる。担当局ではないので、この場で具体的な話ができないが、参考資料を後日お送りさせていただきます。

【会長】

こどもの居場所づくりも大事なこと。こども食堂の取組もあちこちで進んでいる。こういう点についても創造都市からのアプローチで提案してほしい。公開U40でもこども教育という視点があったが何か補足があれば。

【事務局】

労働環境の改善。こどもの土日の居場所も含めた内容。学校教育だけではカバーしきれない部分について、家庭教育・社会教育・生涯教育を活用していくべきという提案があった。

【会長】

男木島で小中学校が再開したが、ふつうでは休校した学校の再開はありえないことだが、その後上手くいっているのか。

【事務局】

うまくいっていると思っている。男木コミュニティ協議会の方も積極的に受け入れしているし、移住された方もコミュニティ協議会に参加し、一緒にまちづくりをして、地域全体を盛り上げていこうとしている。また、中心人物は人間力大賞を受賞するなど注目されている。

【委員】

人口180人の島に、移住者が26人。県外からの移住者も多い。昨年11月には、移住者によるビストロがオープンした。また、保育園が5月にできる。小中学校と同じ場所に保育園があるのはなかなかない環境だろう。

【会長】

小さい出来事ではあるが、非常に意味があることである。「男木島モデル」として全国的にもっと広まってもいい。地方で一番有名になったのは徳島県の神山町。アーティストインレジデンスを10年以上前にはじめて、それがきっかけでICTのサテライトオフィスができて、今度は消費者庁までもってこようとしている。

家族がもどってきて、小中学校などが整備されて、子育て環境が瀬戸芸をきっかけに整った。これを軸にした計画を他地域に広げればよい。こういうことを創生総合戦略に載せることで、国が動き出す。国はモデルを探している。成功事例を全国に広めたいと考えている。過疎地域の再生や地域活性について、戦略的にやってほしい。

【委員】

よそから人口を取り込むくらいの意識があってもよいのでは。災害をきっかけにして、友人からも問い合わせがあるし、岡山なども移住が増えていると聞いている。戦略的に、香川の良さ、高松の良さを出して、ポジティブなかたちで取組むべき。

【事務局】

おっしゃるとおり安全安心面もPRになる。高校生が大学進学で都会に出て戻ってこないという課題。市では「若者から選ばれるまちづくり」をキーワードにあげている。安全安心も含めて、都会とは違う高松の良さを打ち出していきたい。

【委員】

観光は活力にあたるどころであり、外貨獲得、まちのパワーを担うところ、経済の活性化を担うところである。その基準になる指標について、観光施設の利用者数を目安にされているが、日本全国、観光をとりまく状況はドラスティックに変わってきている。高松市が設定している主要な観光施設と現状にずれが生じてきているのではと感じる。もしかすると主要施設に取りこぼしている数字があるのではないかと感覚的に感じる。例えば、トリップアドバイザーで取り上げられているところを見ると、仏生山温泉、イサムノグチ庭園美術館、瓦町FLAG、赤灯台、四国村、八栗ケーブルなどがある。

お客様の動きが変わっている中で、軸となる指標をどう作るかが今後を大きく左右するのでは。とはいえ、観光施設をどう設定していくか、行政の限界をどうカバーしていくのか。例えばU40にマーケティング部を設けるとか。

あと、高松空港の出入り数のデータがわかると有難い。特にFITの動きはなかなかとれないので、細かい実態がわかることで、もっと現場で有効な判断材料になるはず。

【事務局】

施設の設定などについても、行政のかたい頭だけでなくU40やプラットフォームなどを活用して検討していきたい。

空港の利用者数については、市としてデータは持っているが、公表することができない。

【会長】

インバウンドにはメリットもデメリットもある。そのことを十分にわきまえた取組をしていくことは創造都市の観点からも大事。マスツーリズムからカルチャーツーリズム・クリエイティブツーリズムへ。爆買い型のマスツーリズムはおさまってくる。それに合わせた観光地づくりをすると質が下がる。そうではなくカルチャーツーリズムやクリエイティブツーリズムを見越した質の高い文化的なまちづくりを進めることが重要。観光客の量だけを追うのではなく、量と質のバランスが大事。

高松市美術館がリニューアルするが、まちなかにある金沢21世紀美術館が参考になる。10年前の開館当初から入場者数が減らずにこれまで維持し、新幹線開通で、さらに増えた。こうなると、中に入れない人も出てきて、悪い評判がたってしまう。

そういうことも見越して、瀬戸芸も3回目になるので、海外からも目の肥えたお客様が来るはず。質の高い観光地づくりを目指すべき。

【委員】

知り合いに老後を高松で過ごそうとする人が多いが、移住希望の人たちへの情報提供が行き届いていないと感じる。

前回、瀬戸芸に来たお客さまが、商店街近辺でうろうろしていた。行政は直接商売に関われないが、観光客が晩ごはん・お酒を飲むところを悩んでいたという現状。自分のところには岡山の方がよかったという声も届いている。

行政と民間の情報共有がもっと進むと、市民にも観光客にも、みんなにとって良

いものになるのでは。

【委員】

市と県は連携をどんどん深めて、無駄を省くべき。瀬戸芸などでのトイレの問題や案内看板、多言語化の問題。県の方がスピード感のある印象。

【事務局】

観光客の受入環境整備についてですが、案内看板については、国県市が連携して多言語化し整備を進めている。ご承知のとおり、4月にG7の情報通信大臣会合が開かれる。これを機にデジタルサイネージを市も導入予定で、駅や商店街に設置し、観光情報等の多言語化に対応する。商店街全域2.7^{km}に無料Wifiスポットを設ける。商店街の方を中心に多言語翻訳アプリの導入に向けて進めている。

【会長】

内閣が変わると「地方創生」という言葉は変わるかもしれないが、「創造都市」という言葉はユネスコにもあり、世界基準の言葉。

昨年11月に浜田県知事に会う機会があり、香川県も高松市と連携して創造都市を推進してくださいとお願いしたところ、即座にCCNJに加盟してくれた。できれば県内でもう1～2カ所、小さい自治体で創造都市づくりをすすめてもらえればと思っている。県と市が中心となって創造都市を進めていく良い流れになる。いま、文化庁や経産省、総務省が応援体制をとっていかうとしている。

2020年に東京オリンピックパラリンピックがあるが、オリンピックパラリンピックはスポーツ・文化・教育の融合した祭典。ロンドン五輪では、世界中のアスリートとアーティストを呼んで、大きな文化プログラムをイギリス全土で開催した。文化庁はリオ五輪後の4年間で文化プログラムを日本全国で20万件やりたいと思っている。9月の全国セミナーはそれがテーマになる。全国津々浦々でやるとなると、準備しているかどうかで大きな差ができる。いまある瀬戸芸やいろんな事業を組み合わせ、高松市としての文化プログラムの作成に着手していただきたい。

いままでの発言を聞いて、「関わり方」がキーワードになるだろうと感じた。民間と行政の関わり方が創造都市の加速度に関わってくるのではないか。自治基本条例に基づく「協働」の考え。創造都市における協働の関わり方など。

【委員】

U40の報告書にはいい材料がたくさんある。具体的にどう進めていく予定か。

【会長】

そのことも含めて、審議事項にうつる。

(2) 審議事項

ア 創造都市高松の今後の展開について

事務局から説明

【会長】

これからの取組ということですが、この創造都市推進審議会は、ビジョンの進行管理も役割に入っている。ビジョンの取組についてのアドバイスをお願いしたい。

【委員】

国際会議の取組状況で、気になったことが、国際会議だけでなく国内の会議をどう引っ張ってくるかという点。先ほど、芸術士についての視察の話があったが、丸亀町の視察だけで、どれだけの人が高松にきているか。おそらく年間万人を超える

だろう。1万人呼ぶイベントはそうそうないが、県外から注目してもらってわざわざ来てくれている人たちを創造都市に引っ張ってくることを考えるべき。見学・視察イベントをいれてもよいのでは。視察する側もされる側も勉強になる。

【会長】

私も大賛成。ヨーロッパには視察ビジネスがある。有料で受け入れ、宿泊施設なども手配する。丸亀町商店街のように注目されるような取組があれば、海外からも来てもらえる可能性がある。商店街や行政だけでなく、総合的な受け入れをしていくことで、高松の都市ブランドが上がる。

【委員】

食の分野をみると、新規事業（「EAT BEAT in 高松」「たかまつ食と文化フェスタ」など）が改善になっている。自分も参加して改善点があると感じたが、具体的にどのような改善をする予定か。改善の上、継続するのか。

【事務局】

継続に向けて改善していくという意味である。食は観光客の満足度の4割を占めている。EAT BEATでは、うどん以外の高松の食に注目して、高松の食材を「音楽」という新しい切り口で発信した。

「たかまつ食と文化のフェスタ」については、8年間やってきたので、一旦見直しをし、今後は食文化を活かした観光振興事業として、より魅力的で洗練された事業を展開していく。今考えているのは、食に関する方やイベントに携わる方から、高松における食文化を活かした観光事業を提案していただき、その中から事業化したいと考えている。今回の瀬戸芸のテーマも「食」なので、そこと相乗効果が出る形で、それとは違った切り口の取組を考えたい。

ガイドブックは、EAT BEATの前段階として、高松の食文化の発信のために作成したが、予算等が十分ではなく部数も少なかったので、発信力が弱かった。観光客をターゲットとして、ホテル、旅館、商店街の飲食店などで配布し、一定の効果は出たが、改善が必要である。

【委員】

文化芸術振興も大きな柱のひとつであり、いろいろ行事をやられているが、美術館やサンポートなどの文化施設との関係がわかりにくかった。市は年間通じて、いろんな事業をやっているのだから、市内の文化施設との連携、フル活用が必要。

審議会での内容が、現場にどう活かされているのかが気になった。

【事務局】

本市では、H25年12月に文化芸術振興条例、H26年3月に文化芸術振興計画を策定しており、計画の中でも、既存施設との連携について取り上げている。例えば、今年度だと「0才からのコンサート」を従来の文化施設だけでなく披雲閣を使用して行っている。振興計画は4年間の計画。来年度が2年目にあたるので、今後の内容に御意見を反映させていきたい。

【委員】

「こどもを育み育てやすいまち」を目指すとする。こどもにとって、すくすく育つ、こどもの居場所のあることを考えると、私の目から見ると、それは家族でありコミュニティである。男女参画は、私の目から見ると、女性が男性と同じように働く場があり、こどもは保育所で育てられるというような風習があるように感じている。それが悪いとは思わないが、こどもから見るとすごく矛盾しているように思う。

自分自身、東京ではこどもを育てられないと思い、高松に来た。東京だと、夫は毎日帰りが遅く、こどもと私だけの日々になると思うが、高松なら職場に近いところで自分の家を借りて、例えば晩ごはんのときだけ帰ってきて一緒に過ごしてまた仕事に戻るということもできる。自分たちで自分のこどもを育てたかった。経済的

には共働きが必要だったが、自分の家で仕事ができる体制が高松ではできた。高松だからできた働き方があるのに、それが魅力として捉えられていない。日本の主流のような生活ではなくて、「ここではできる」というアピールをしてほしい。都会に住んでいる若者はそれを求めている。こどもは自分で育てたいが自分のキャリアは捨てたくないというひとたち。「高松ならではのライフスタイル」を伝えるべき。高松には質の高いものがある。

男木島は良い例になるが、そこでできた理由は、すごく忍耐強く関係をつくった、大島さん夫婦のような方がいたから。島民からの信頼を得て、つなぎ役ができたから。それを他のところでもできるはずだと思う。

外国の目から見た高松の観光について。高松はいろんなところに可能性がある。質の高い観光につながる材料がたくさんある。もし私が友達を案内するなら、仏生山は1日楽しめる。法然寺も素晴らしいし、新しい試みと伝統がある。イサムノグチ、ジョージナカシマ、ビーチ、庵治の風景がすごくきれい。建築でいうと丹下健三、安藤忠雄。これはアートシティ高松のブログでもヒットしていて、スイスからわざわざそれを読んで来る人もいた。村上春樹の「海辺のカフカ」もヒットした。カタマランに乗って男木島などの島巡り。大道芸やまちなかクラシックなどの時期に外国人観光客が来れば、ほんとに満足度が高いはず。

外国人がわざわざここまでくる理由は、海がすぐ近くにあること。それから温泉。あとは、その地で出会う人。お接待の文化に触れる。

ヨーロッパ、アジア、北米、どこをターゲットにするかで戦略が変わるし言葉も変わる。そのあたりを専門家と相談してすすめるべき。

【委員】

スポーツの視点でみると、交流空間とこどものところに記載があった。回遊したくなるまちづくりという点で青森県弘前市のNPOの取組について紹介したい。ジョギングのマップを作り、作って終わりではなく、早朝に地元の公園を走る企画を立てたり、その公園から近いホテルにジョギングマップを置いて、地元の人と観光客の交流が生まれる仕組みを作っている。高松市でも地元の人と観光客の交流が生まれる仕組みを作れたらと思った。

こどものところにある「文化としてのスポーツ」という考え方。図書館に行くのと同じ感覚で体育館を利用するように気軽にスポーツを楽しんでほしい。香川県のスポーツ少年団加入の割合が18%で全国的にも低い。ニュースポーツなどでスポーツを楽しみ、はじめるきっかけづくりに力をいれれば。

四国活性化プロジェクトのシンポジウムに参加した。テーマは「ニュースポーツで四国を元気に」ということで、特産品を利用してニュースポーツを提案するという内容。香川県の代表は、ポートボールとハマチをかけあわせて、ハマチ型のボールを網ですくう「ハマッチング」というニュースポーツを提案していたのが、とても印象に残っている。

【委員】

スポーツの話でいうと、体育館がなかなか借りられないという声をよく聞く。利用条件がいろいろあるが、統廃合された学校の体育館など、もっと借りやすくなればいいと思う。

U40で出ていた空き家対策、リノベーションの取組がどう進んでいくのかが気になった。

あと、育児放棄、小学生が夜遅くまで公園で遊んでいたりが気になる。

【委員】

資料をみると、事業がジャンル別で分けられていると思うが、例えば、高松城・栗林公園・法然寺は松平家の文化歴史という括りができるが、ストーリー性のある大きな括りでとらえると違った切り口となって、興味の幅が広がるのではないか。

【委員】

広報についての視点。取組状況を見ると細かいところまで分析されていることがわかるが、そもそも市民は創造都市の取組としてこれだけたくさんのことをされているということをどれだけ知っているのだろうか。どうプロモーションしていくかという課題。既存の事業と、特に創造都市を推進している事業をさびわけて、ロゴマークをつけるなどすると、見ている方にもわかりやすい。

海外の事例などをみていると、創造都市に住んでいる人は、創造都市に住んでいることや創造都市をつくっていくということを誇りに思っている。住んでいる人が自覚しない限り、取組は進まないし、外から来てくださる方にも伝わらない。そのためには「プロモーション」していくということが、欠けているのでは。

これがもしかしたらU40の活躍の場になるのではと思っている。彼らが、広報戦略やプロモーションについて、お仕事として取り組めれば、今回提案された新しいチャレンジについても、予算を使わなくても、チャレンジができる道ができるのではないか。

【事務局】

FBや会議資料にロゴマークを入れたりしてはいるが、なかなか浸透していない部分が多いので、今後プロモーションに力を入れたい。

審議会の場だけでなく、御意見などあれば、引き続き事務局にいただきたい。

本日欠席している徳増委員からの意見を紹介する。

- ・審議会の開催回数が少なすぎる。ビジョン作成時の勢いはどこに行ってしまったのか。
- ・創造都市推進ビジョン策定後の取組状況について、目的と成果が不明確である。客観的な検証を行い、取組の在り方を考慮すべき。

【会長】

高松市は推進審議会を条例で設置しているが、これは全国でも類を見ない。ビジョン策定後も審議会で進行管理することになっている。年に1回なのか2回なのかは問題もあるが、もうちょっとあってもよかったかと思う。

先ほどU40の方から、創造都市が踊り場状態にあるという意見があったが、まさにその通り、この先どう進んでいくか、おもしろいところでもあるが、悩みどころでもある。大事な時期に差し掛かっているという認識。局職員とU40がジョイントで議論しているということはとても良いこと。このような取組も全国的に珍しい。

この秋のセミナーでは、有力な自治体も参加するのでそういう中で、全国に向けて、高松のモデルをどうみせていくかが大事。

ユネスコはネットワークがどんどん広がっている。世界を視野に入れた展開にも目を向けていくと、市民の人へのインパクトもあってよいのではないか。

【事務局】

今回は5月に開催予定

3 閉会

